

紫の上の教養—教養の多義的機能とその挫折—

林 悠子

北山で光源氏に見出された紫の上は、葵巻で源氏と新枕を交わしてから、幻巻でその生涯を閉じるまでの約三十年を源氏の最も近い妻として過ごす。夫源氏との共有物となるべき子供や、頼みとなる後見を持たなかった紫の上にとって、教養は源氏との関係を育むための重要な手段であった。紫の上の教養は、源氏との関わりにおいて、あるいは、源氏の他の妻妾や、義理の娘である明石中宮との関わりにおいて、どのように機能したのであるか。特異な結婚生活ゆえに、紫の上にとって重要な役割を果たした教養の多義的な機能が、若菜巻以降無力化されていく過程を以下に考察する。

一、結婚生活の虚構性

紫の上が、源氏の妻としてどのような処遇されていたかという問題は、正妻であったか否かという議論を中心として、既に先行研究の中で多く論じられてきた。先行研究を踏まえながら、紫の上の結婚生活の内包する不安定さを確認したい。

紫の上の人生を、その処遇に着目して見た時、その処遇は一

貫しているとは言いがたく、いくつかの矛盾点が挙げられる。それらの矛盾点が紫の上の妻としての位置を考える時に、多くの混乱を招くのである。その最も大きな矛盾点として、先ず、略奪されるように源氏の妻となった宮家の側室の子が、「若菜上」巻に至るまでとはいえず、当代第一の権勢を誇る源氏の第一夫人としてを得て華やぐことの不自然さが挙げられよう。継子物語の話型であり、非常に物語的な設定といえるだろう。さらに、藤裏葉巻で、輦車を許されるほど威勢のよい人が、すぐ次の巻で内親王の降嫁によって、いともあつげなく第一夫人の座を追われることへの疑問が挙げられる。紫の上が正妻か否かを論ずる時、彼女をめぐるこれらの非現実的な扱いをどのように説明するかが、焦点となつて来るのである。

紫の上を正妻と考える立場には、林田孝和氏、宮川葉子氏、園明美氏などがおられ、紫の上が藤裏葉巻で、御阿礼詣に、牛車二十両を連ねたことと、入内する明石女御と輦車に同車したことを主な根拠として、紫の上を正妻であると考えておられる(1)。宮川氏は、女御の入内の準拠として藤原彰子の入内を挙げ、倫子同様、紫の上も三位に叙せられたとし、御阿礼詣の牛車二十両も、叙位があるほどの紫の上だからこそ、世間も納得したとされる(2)。宮川論文を受けて、園氏は、藤裏葉巻

の「御輦車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬ」を『延喜式』に見える、身分によって乗る場所の異なる輦車に、女御と大臣嫡妻が同じ場所でも乗車する規定(3)のことをいっていると解釈され、この時点で、紫の上は源氏の正妻として認知されていると考える(4)。女三の宮降嫁後の紫の上の処遇の変化については、林田氏は、男性が昇進に応じて、位に見合った正妻に妻を置き換える習慣と、床譲り、床離れ説により説明される(5)。園氏は、小一条院となつた敦明親王の妻たちが、式部卿宮時代には、「北方」「妻」と称されていたが、院号を得た後には、「御息所」「女御」と称号が変化していることを考えると、准太上天皇となつた源氏の妻妾の序列は「准後宮」の新たな枠組みの中で捉えなおされ、紫の上は、「大臣嫡妻」の地位を失つたのだと考えておられる(6)。

一方、中野幸一氏、工藤重矩氏、木村佳織氏らが紫の上を「正妻格」として考える立場をとっておられる(7)。この立場に共通するのは、紫の上が社会的に公認されない形で源氏と結婚をした以上、正妻として社会的に認知されず、権力者源氏が、正妻として遇すことに倣つて、世間も正妻として処遇するが、形式上正式な正妻ではないので、女三の宮が公的に正式な手続きを踏んで正妻として降嫁しようとするのに対抗できなかつたという認識である。工藤氏は、女三の宮の出家が、法的には源氏との離婚に準ずることから、紫の上の「正妻格」の地位は回復され、源氏の服喪もこの嫡妻待遇によるとされる(8)。

木村氏は、輦車の宣言には、帝個人の私的な意向によるものもあり、すぐに正妻としての認識には結びつかないという(9)。梅村正子氏が、「撰関家の正妻」(10)の中で、源氏とほぼ同時代の撰関家の結婚を調査したところによれば、公的な結婚をした正妻であれば、出自に関係なく、結婚後に他の正妻に置き換えられることによって、格下げされることはないといわれている。工藤氏も同様の見解を示しておられる(11)。女三の宮降嫁が可能となつた理由は、紫の上が正式な結婚を経なかったことに求められるのである。

これらの論を概観する事によって見えてくるのは、皮肉にも紫の上が正妻であるとも、そうではないとも読めてくることではなからうか。六条院完成後から、明石女御入内までの紫の上が、実質的に六条院の第一夫人であり、正妻と呼ばれるべき立場にいたことも、紫の上の後見・格式が、例えば葵の上と比べた時に、源氏の正妻としては不足であったことも確かであろう。注目すべきは、梅村氏の「撰関家の正妻」の範囲内で考えるとすれば、紫の上正妻論も、否正妻論も成り立たないことである。高木和子氏は、梅村論を『源氏物語』に当てはめることの矛盾について、史実では、恋愛によって非公式に始まった婚姻でも、同居を契機として正妻と認められたはずであり、正妻として認知されているのであれば他の正妻によってその座を追われることもないはずであることを指摘される。史実の「撰関家」の範囲内で考えられないとなれば、園氏(12)の指摘されるよ

うに、源氏が准太上天皇の位を得たことによる変化を考えねばなるまい。しかし、園氏が「貴重な参考例」として挙げられる、小一条院は、氏自身も指摘される通り、東宮を辞退したいきざつをもっており、臣籍降下はしていない。臣下に下った一世源氏が、准太上天皇という史上に例のない位に上るといふ物語の設定は多分に虚構性を内在している。必ずしも、史実と並べて考えることはできないのではないだろうか。また、小一条院が院号を賜うのは物語成立以後のことであり、成立時に先例がないことで、物語はより多くの虚構を許されたと思われる。虚構性の次元からいえば、源氏に院号を賜う冷泉帝が、源氏の公式な正妻ではない紫の上に実父への好意として輦車を許すことも考えられるだろう。そもそも、源氏は当初紫の上の養父としての役割を果たしている(13)のであり、紫の上は、いわば養父と結婚することとなるわけで、この設定したい現実には考えたい物語的な設定である。紫の上が正妻であろうとなかろうと、准太上天皇の位を得た源氏に、紫の上の妻としての格がつりあわなくなつたことは変わりなく、その矛盾は、物語の虚構性の中に内包されていくのではないだろうか。高木氏は、物語の結婚の虚構性を十分に認めたくえで、紫の上を源氏、あるいは作者によって意識的に格上げされた「正妻格」とみならず、その立場は「きわめて(境界的)」(14)であるという。氏はさらに、「制度や史実から逸脱するからこそ、その生命があつたとおぼしい光源氏と紫上との関係が、現実の社会と擦り合わ

されていくという、それ自体がきわめて矛盾を孕んだ展開となつていく。」と述べられるが、では物語的である二人の結婚生活は、具体的にはどのように現実的な社会と対峙したのだろうか。

二、「幸ひ人」紫の上の命綱としての教養

紫の上の妻の座がはじめて深刻に問われるのは、源氏と、朝顔前斎院の縁談である一般的な言われるが、それほど深刻ではなくとも、紫の上の結婚が、世間の常識とかみ合わないために、不安定さを匂わせる記事は、新婚直後にも多く見ることができる。

新枕が突発的に、しかも葵の上の服喪中に交わされたために、婚礼の儀式は、極端に縮小された形で内々に行われた。突然のことに、驚き恨む紫の上に対して、源氏は、「などかくいぶせき御もてなしぞ。思いの外に心憂くこそおはしけれな。人もいかにあやしと思ふらむ」(葵巻)と言ひ、結婚の事実を紫の上付きの女房にすら告げようとしな。乳母の少納言ですら、三日夜の餅を見るまでその事実を知らされず、女房らは「さても、内々にのたまはせよな。かの人もいかに思ひつらむ」(葵巻)とささめきあうのである。用意され整った儀式ではないため、事情を知らない少納言の娘が「あだなることはまだならぬものを」(葵巻)と不吉な言葉を言ひ、惟光に咎められている。

女房らも知らぬほど、極端にプライベートな結婚が、早くも女房に最も忌むべき言葉を言わせるという不吉な結果を招いているのである。「プライベートな結婚」という言葉は奇妙であるが、そもそも三日夜の時点で、源氏と紫の上が婚姻関係にあると考えているのは、当人達と、惟光と少納言のみであり、あまりに狭い範囲であるといわねばならない。しかも、紫の上は、さすがに源氏の妻になつたことは理解出来ただろうが、後朝の文の返歌もせず、全く納得していない。それは、紫の上の甘えであり、双方の強い絆をかえつて表出するともそれようが(15)、新婚翌日の後朝の文が、源氏の一方的な贈歌で、贈答が完結しないというのも、異例であり、幸先の良い結婚生活のスタートとは言い難いだろう。しかし、注目すべき事に、そのよ

代わつて正妻となる訳ではないことが、結婚直後に示されるのである。

その後、結婚を公表するために兵部卿宮に知らせて、裳着を行つたがそれも、

この姫君を、今まで世人もその人とも知りきこえぬもの
げなきやうなり、父宮にしらせきこえてむ、と思ほしなり
て、御裳着のこと、人にあまねくはのたまはねど、なべて
ならぬさまに思しまうくる御用意など、いとあり がたけ
れど、女君はこよなう疎みきこえたまひて…(葵巻)

とあるように、世人が紫の上の素性を知らないのが不都合であるとして催されたにもかかわらず、どちらかといえば私的なものとして行われたようである。ここにも、紫の上を大切に思いながらも、世間の認識に配慮せざるをえない源氏の姿が見られ、注意される。

りないのであるといえよう。一連の新枕の記事の直後に、葵の上が亡くなつたので、臙月夜がその後釜に座つても不都合がないという右大臣の言葉は(弘徽殿太后により拒絶されるが)象徴的である。高木氏の述べられるとおり、物語は、葵の上死後に新枕を書く事によって、紫の上が源氏の第二夫人となることを周到に避けてはいるが(16)、紫の上が自動的に葵の上に

とはいへ、光源氏が形式を整えて公表した妻が、世間の注目を浴びないはずはなく、賢木巻には、「西の対の姫君の御幸ひを世人もめできこゆ。」と世間から認知され、賞賛される紫の上がみえる。しかし、この賞賛も、実家の後見を期待できない紫の上の、当代きつての貴公子に愛されたことへの好奇と羨望のまなざしである。紫の上の身に不幸が訪れば、世間は幸運

を賞賛する以上の熱心さをもつて、うわさをするに相違なく、加えて紫の上には、幸福であろうと不幸であろうと、大声で悪口をいう継母がいる。世間との交流が断たれた須磨巻でも、「にはかなりし幸ひのあわたたしさ。あなゆゆしや。思ふ人、かたがたにつけて別れたまふ人かな」という継母のせりふが紫の上の耳に入るのであるから、よほど大々的に喧伝しているのだと思われる。このことを、世間もおもしろがつて伝えるだろう。大体にして、平安貴族は世間体を気にせねば、社会的破滅を招く結果になるので、作中の女性たちも、「人笑へ」「人笑はれ」にならぬよう、思慮深く身を処そうとするのだが、紫の上の場合、世人のもつとも注目する光源氏の第一夫人であるのみならず、身分的には破格の結婚生活を送っているために、世間の好奇の目は、よけい執拗であるといえる。そして、そのために彼女には、世間を納得させる理想性が求められるのである。また、木村氏が指摘されるように(17)、紫の上にも母方の按察大納言家の遺産が相続されている可能性は、十分に考えられるのだが、物語はそれを書くことをしない。源氏の須磨退去の際に、所領を任せられることは書くのにである。結果として、読者は、源氏と朝顔齋院との一件などと合わせて、紫の上の立場が、源氏の愛情のみを頼りとしている印象を受けるのだ。源氏の愛情は、紫の上が藤壺と血縁であり面差しが似て美しいことと、紫の上の聡明さと人柄による。紫の上が藤壺の形代として愛されていることを承知していたか否かは難しい問題であ

殿籠もるまじきよ」と教へきこえたまへば、いとわびしくて泣き臥したまへり。(若紫巻)

と、本能的、身体的な恐怖感を感じている。紫の上を懐柔するため、源氏は女童を召し、絵やおもちゃを見せながら話しかけている。それに応じて紫の上も、「何心なくうち笑みなどしてゐたまへる」(若紫巻)と打ち解ける様子を見せるのだ。この直後には、源氏は紫の上の手習や絵を教えており、紅葉賀巻に至るまで、源氏は紫の上と雛遊び、絵、手習を介して共感を育んでいく。雛遊びが教養であるとは言い難いだろうが、川名淳子氏が述べられるように雛遊びが単なる遊戯でなく、親や女房の介入、禁止により管理された姫君教育の必須のプロセスであったこと(18)を考えれば、幼い少女たちにとっては、教養に準ずるものであったと思われる。川名氏の指摘されるように、女性関係に疲れた源氏が、無邪気な少女によつて慰められるという物語設定に要請され、紫の上の自我を表出する和歌、書、箏の琴、の習得は最低限に抑えられているが、(19)全く書かれないわけではない。寝殿の奥で、男と若い少女が対面する時、時空間を共有するためには、何かしらの共有物が必要とされる。歌を詠む、絵を描く、雛で遊ぶなどの教養・文化的活動は共有物として二人を繋ぐべく機能するのである。これは、源氏と若紫の例に限らず、男女においても、同性同士や、人数が増えた場合でも、一般的な傾向としていえるのであり、ただ、

るが、承知していないとすれば、紫の上の側としては、己の才覚を頼むほかないのである。源氏の寵愛を絶えず得るためにも、世間のきびしい視線からの保身の手段としても、機知に富む一方で、思慮深く振舞う教養が求められるのである。紫の上にとつて、自身の教養の高さは、結婚生活を守るための命綱であったと思われる。

三、教養によつて育まれた関係

先に述べたとおり、紫の上の教養の高さは、源氏の寵愛を得ること、また、世間の好奇の目から自身を守ること、の二点において欠かせないものであった。本節では、物語初期の紫の上が教養を介して、源氏との密接な関係を育んだ過程を追いたい。源氏に、奪われるような形で二条院へ連れてこられた紫の上は、突然のことに驚き、警戒した様子を見せる。紫の上を自邸に迎えとろうと、眠っている紫の上を抱き起こし、「いざたまへ。宮の御使にて参り来つるぞ。」という源氏に対して、紫の上は「あらざりけりとあきれて、おそろしと思ひたれば……」という反応をみせる。また、二条院に連れてこられた直後も、

若君は、いとむくつけう、いかにすることならむとふるはれたまへど、さすがに声たててもえ泣きたまはず、「少納言がもとに寝む」とのたまふ声いと若し。「今は、さは大

源氏と紫の上の場合、一方が極めて優れた教養をもち、一方が少女であることによつて、源氏の教育というかたちで現れるのである。源氏が教えるのに応じて、紫の上は理想的にそれに答え、物語は紫の上の聡明さを前面に押し出して描く。秋山虔氏が指摘されるように、「状況に応じて理想的」に描かれる紫の上は、一貫した個性や内的成長を描かれることがない(20)のだが、そのことが、源氏に強い親近感を抱き、密接な関わりをもつ紫の上を強調することになる。中西紀子氏は、雛遊びで追儼の場面を再現しようと大騒ぎする紫の上が、女童が雛遊びの道具を壊してしまった事を、「犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくるひはべるぞ」と「はべる」を用いて、儀式責任者が長官に言上するように言うのに対して、「げに、いと心なき人のしわざにもはべるかな。いまつくるはせはべらむ。」とやはり「はべり」で丁寧に応答するように、機転に富み、息の合った応答を楽しむ姿を指摘される(21)。もちろん、物語はただ二人の仲の良い姿を書くのみではない。中西氏の述べられるように、雛遊びが乳母によつて強制的に修了された後、源氏の妻となるべく教育される紫の上は、花宴巻に至つて、二条院を退出する源氏を目の前にしても「例のと口惜しう思せど、今はいとようならはされて、わりなくは慕ひまつはさず。」と耐えることを覚えさせられているのである(22)。結婚後の紫の上は源氏の他の妻妾と寵愛を競うことにはなるが、既に指摘されるとおり、朝顔巻まではさほどの深刻味を帯びない。も

ちろん紫の上に寄り添って物語を読むのであれば、明石御方の存在は、本人にとつては深刻なものであると思われる。しかし、後の女三の宮降嫁を知っている我々読者からすれば、その深刻さも相対化されてしまうのだ。物語は明石御方に嫉妬する紫の上を描くが、その嫉妬は紫の上と源氏が結局のところ深く繋がっていることを前提としているのである。賢木巻に見られる、紫の上の書を見た源氏が、「常に書きかしたまへば、わが御手にいとよく似て、いますこしなまめかしう女しきところ書き添へたまへり。」と満足する記事には、日頃から頻繁に文をやりとりすることで、ただ親密な関係が築かれているということを超えて、良く似た文字を書くという同一化ともいえる現象が読めるといえる。(紫の上が二条院に引き取られた当初、紫の上の筆跡は「故尼君のにぞ似たりける。」と書かれている。) 明石巻には、

絵をさまざま描き集めて、思ふことどもを書きつけ、返りごと聞くべきさまにしなしたまへり。見む人の心にしみぬべき物のさまなり。いかでか空に通ふ御心ならむ、二条の君も、ものあはれに慰む方なくおぼえたまふをりをり、同じやうに絵を描き集めたまひつつ、やがてわが御ありさま、日記のやうに書きたまへり。

とまるで、魂が呼応するかのようには、京と明石という時空を超

の寵愛だけでなく、女君たちの名誉をかけた競争であるともいえよう。さらに、妻妾個々の動向についても、院内に同居していれば、色々と伝わりやすくなる。もとより、「幸ひ人」である紫の上が、常に世間の必ずしも好意的であるとは限らない好奇の目にさらされていることは、既に確認したことであるが、六条院内においては、第一夫人である紫の上の一举一動が、世間よりもより近い場所から、他の妻妾と大勢いるその女房たちによって注視されるようになっていく。六条院を舞台として、特に、いわゆる玉鬘十帖といわれる巻々において、大小、公私様々に華やかでみやびな行事が催されている訳だが、そのみやびの陰には、極度の緊張感が潜んでいることを、見逃してはならないだろう。尾崎佐永子氏は、みやびについて

やりとりされることばのひとつ、手紙のなかの和歌の一首、それを書く紙の色、たきしめた香りに至るまで、時に適った趣味の良さの間われる時代でした。そこから落ちこぼれたら、いかに身分の高い生れであるうと、くらしていくことの難しい時代でもありました。必然的に、文化性は切磋琢磨を要求され、洗練された感覚と教養とがじつにシビアに競い合われる形になったのです。(中略) 一見、風流で自由でしゃれていて、遊びの要素が強そうにみえながら、「雅び」とは、じつは厳しい修練を経、磨かれた感覚に支えられた者たちの、緊張とスリル

えて、二人が同時期に絵日記を書くという場面が存在する。少女時代の紫の上は、源氏と共に絵を描くことを楽しんでいく。絵は、源氏と時空間を共有するための重要な手段の一つであり、時空間が共有できなくなった状態においても、源氏につながるものとして意識されたのだと思われる。また、須磨時代を除けば、紫の上は源氏と生活空間を共有しており、彼女は、「光源氏に特権的に深く関わる相手であった。」(23)。このようにして、物語は、源氏と紫の上の異様なほどの密着を描いていく。二人の濃密な関係は、絵や手習、和歌、文の贈答などの教養的活動を共に行う姿が描かれることによって、物語の中で必然性を帯びてくるといえよう。

四、六条院を舞台として競われる教養

少女巻において、六条院が完成し、源氏の妻妾らが四町に集められることは、紫の上の教養を考える上で、重要なターニングポイントとなる。それまでも、妻妾たちは源氏によって人柄や教養を比較されてきたのであるが、主だった妻妾たちが、六条院に結集することで、行事の準備や、院内の私的なイベントを共に担う機会が増え、いわば物理的に比較されやすくなったのである。それは、宮中の後宮における寵愛をめぐる争いと極めて類似した様相を呈しているが、秋好中宮や、玉鬘など、源氏の養女格にあたる女君も内包されている点において、源氏

に満ちた世界でもあるのです。

と述べておられる(24)。歌人である尾崎氏は、例えば、状況に応じた和歌を即興で詠むことの難しさなどを、体験的に熟知しておられると思われる、みやびが緊張を伴うとの指摘は重い。六条院の主である源氏も、この緊張感が、六条院内の教養・文化の向上に繋がることを承知して、妻妾たちがみやびを交わすことを期待している。妻同士ではないが、紫の上と秋好中宮の春秋優劣論をとりもち、彼女たちの交流の場となる六条院を「いとど思ふやうなる御住まひにて」(少女巻)と思うのである。春秋優劣をめぐる贈答は、紫の上と秋好中宮によって行われてはいるが、おそらくは他の妻妾らも、六条院内のイベントとして、成り行きを注視していたと思われる。そのような中で、紫の上は中宮の手紙に対するとっさの返事として、精巧な作り物に和歌を添えて返す。

御箱の蓋に苔敷き、巖などの心ばへして、五葉の枝に、風に散る紅葉はかるし春のいろを岩ねの松にかけ
てこそ見ぬ

この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬつくりごとどもなりけり。(少女巻)

急な手紙にすぐ対応できる用意の良さと、機知に中宮とその

女房らは感心したと書かれる。紫の上はこの他にも、室礼、女童の衣装など、生活の隅々まで、完璧に行き届くのである。源氏のみならず、女君たちの女房らも、居所に訪れるため、室礼の趣味は注目されており、また、女童は使いとして、他の人々の目に触れることの多いわけで、それらに趣味の良さがもめられるのも当然のことであろう。さらに、行事の際には、公的な空間ともなる庭に気を配る必要性も納得できる。

梅枝巻の、薫物合わせは、女君たちの教養がそのまま比較される行事であったが、ここでも紫の上は、八条式部卿宮家の秘法に、工夫を加えて、高い評価を得ている。女君の書を論ずる源氏にも、上手の一人として数えられ（源氏自身の字に似ているのだから、当然である）紫の上の教養の高さは、他の妻妾たちよりも、優れたものとして賞賛されるのである。このことは、妻妾たちの中で彼女の立場を優位なものとして保障する。しかし、六条院の第一夫人であり、世間の視線を集める立場にいることは、活躍の場をより多く与えられることでもあり、また、第一夫人であるからこそ、他の妻妾へ遠慮することなく、存分に教養を発揮できるのである。六条院の女主であることが、紫の上を、教養において他の妻妾らよりも優位に立つことを可能としており、他より優れた教養が、紫の上の第一夫人としての地位を支えている。紫の上の六条院における地位と、彼女の高い教養とが相互に貢献しあっているといえよう。

らの援助からは、妻妾たちのリーダー的な紫の上の側面が見られ、他の主催者と並んだ時に、源氏の子として算賀を主催すると思われる紫の上の側面が見られることから、紫の上の養育されて妻となった宿世と才覚が証せられるとしておられる（29）。川名氏は、「准太上天皇の賀を主催するという社会的行為は世俗の眼に曝され、きびしく見つめられているということを忘れてはならない。」とされるが（30）、世人の厳しい視線のなかで、紫の上はともかくも、形式的には完璧に賀を遂行し、世間からとやかく言われるのを免れたのだと思われる。このように、紫の上の対世間の問題はひとまず賀の形式的な成功によって解決されたが、源氏四十賀において紫の上と源氏の間のお話は物語に書かれず、賀が盛大であるだけに、かえって両者の心中の虚しさが想像されるのである。算賀は、新しい人々が一同に介する機会でもあり、私的な玉鬘主催の賀では、源氏と玉鬘の対面が見られ、玉鬘の子供らも集っているが、紫の上主催の賀は、公的に盛大であるために、人々が近しく交流する余地を残さなかつたとも言えようか。中西氏は、この賀における源氏をかつて紫の上が遊んだ「源氏の君」の雛人形を思わせるとされている（31）。確か世評を気にせねばならない紫の上が、完璧に格式を整えた賀の中に、源氏が主体性をもって自由に動く余地はないということなのだろう。

女三の宮降嫁によって、もはや自分の才覚では源氏の心を動かすことが絶望的に不可能であることを（それはとりもなおさ

五、教養による共感の挫折

女三の宮降嫁は、紫の上の教養や才覚ではどうにもならないところで決められ、紫の上は、源氏の愛を自らの才覚によって繋ぎ止めることへ大きな挫折感を味わう。そもそも、彼女にとって源氏の愛を信じるということは、自分の高い教養と才覚への自覚と表裏一体であり、源氏への不信はそのまま、自尊心を傷つけることにもなる。世評を恐れる紫の上が、唯一己の才覚と、教養によってできたことは、世間からの視線に対して女三の宮降嫁が何でもないように振舞うことだけであった。女房たちには、苦悩を見せまいとするために、寝付けぬ床の中で、周囲の目を憚り、身じろがないなど、私的空間でも「極度の精神の緊張」（25）をみせるが、女三の宮降嫁によっても、「表立った六条院北の方としての紫の上の地位、権勢」（26）が衰えないことを、世間にアピールする最初の公的な機会となつたのは、源氏の四十賀であろう。准太上天皇の算賀としての格式を備えた紫の上主催の賀は盛大であり、主催者の采配の手腕は評価されたに違いない。しかし、この賀の主催に、武者小路辰子氏が紫の上の妻としての高い格式を見ている（27）のに対して、川名淳子氏は、紫の上は源氏に養育されたものとしての立場から賀を主催していると考え、源氏の庇護頼みであることが表面化して、紫の上の地位は下落していると考えておられる（28）。高田祐彦氏は、「紫上の両義性」を認め、御方々か

ず、紫の上は源氏の心はどうにかする手段は皆無であることをあらわすが）知らされた紫の上だが、源氏は、六条院の重苦しい空気から逃れるように朧月夜と密会を重ねる。三の宮との対面をひかえて、憂鬱な思いの紫の上が、手習にその思いを書きつける場面が、「若菜上」巻に描かれるのだが、この手習を見た源氏は、返歌を書き、紫の上を慰めるものの、紫の上が三の宮に対面する機会を狙って、朧月夜のもとへと赴くのである。手習の直前には、「去年より今年はまだ、昨日より今日はめづらしく、常に目馴れぬさまのしたまへるを、いかでかくしもありけむと思す。」と紫の上への賛辞を惜しまない源氏が、苦悩する紫の上をおいて、朧月夜に逃避する。ここではもはや、源氏の理論は、紫の上の美質とは無関係に働いている。明石巻で、紫の上の文が、明石のもとへ赴こうとした源氏を思いとどまらせたのは、遠い過去のことである。

「若菜下」巻の女樂は、紫の上にとつて、源氏の後ろ盾を得て琴を演奏する女三の宮に、格式の劣る和琴と箏の琴で挑まねばならぬという、絶対的に不利な状況で、夕霧や明石たちの目にさらされ、比べられるという状況をもたらした。ここでも、紫の上は見事に演奏するが、その直後、発病する。源氏と心を通わせることをずいぶん前に諦めた紫の上は、世評に対して高いプライドをもって対抗する事にも、疲れ果てた瞬間であるといえよう。

六、紫の上の自己矛盾

「若菜」巻以降に描かれる紫の上の葛藤の内実が、愛欲や嫉妬よりは「存在価値意識」の模索に求められることは、既に指摘されたとおりである(32)。自己の存在価値を模索することは、紫の上にとってそのまま挫折に直結する危険な作業であったと言わねばなるまい。紫の上が何故六条院に存在するのか、という問題には、多くの矛盾が内包されているからである。

「若菜上」巻に書かれる源氏と女三の宮の婚礼直後に立ち戻って、彼女が直面せざるをえない最初の矛盾について考えたい。針本正行氏は、源氏と女三の宮の新婚三日目に、紫の上は手習いをする事によって、源氏との不安定な関係性を確認したとされる(33)。この夜、女三の宮方に滞在する源氏は紫の上を夢に見たので、早朝に紫の上のもとに戻るが、紫の上の女房らは、空寝をして源氏をすぐには室内に入れない。針本氏はこの場面は、催馬楽の「東屋」を背景にしているとされる。

東屋の 真屋のあまりの その雨そそぎ 我立ち濡れ

ぬ殿戸開かせ

錠も 錠もあらばこそ その殿戸 我鎖さめ おし開いて来ませ 我や人妻

えて、紫の上の前途に困難が待ち受けることを予見しているともいえるのかもしれない。ただそれと同時に、この和歌が若紫の少女によってどのように詠まれたかを考えることも大切であろう。今井久代氏は、紫の上は、源氏の詠みかけた「ねは見ねどあはれと思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを」(若紫巻)と「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ」(古今六帖)の「二首のことはをふまえながら光源氏の歌にまっすぐ反発するという、贈答の作法に沿って歌を作っただけ」であり、「このとき若紫にとっては、いかにお見さまに感心して頂けるように、祖母君から教えられた作法通りに、歌を作るか、それが問題である。」(34)とされる。紫の上の存在意義模索のように読者には読めるこの歌が、若紫の少女にとつては、源氏の意に沿うように、と心がけて詠んだものであったということは、源氏の期待に応えることが、そのまま存在価値となりかねない紫の上を象徴的に表しているといえるかもしれない。

若菜上巻に二箇所見られる手習の場面において、紫の上は源氏との関係性の不安定さを確認している。しかし一方で、これらの手習が紫の上の独詠として完結せず、結果的に源氏と紙面上における贈答の形をとることは、どのような意味があるのだろうか。篠塚純子氏は、紫の上の歌が「半ば独詠」の形をとることで、源氏から解放されない彼女の葛藤が表出されるのだが、それといわば表裏の関係で、解放されないからこそ、源氏

結果的に、紫の上が「我や人妻(私はあなたの妻ですよ」と針本氏は解釈される)」と、主張している形となったというのである。このようにして、紫の上は「六条院での自分の存在意義を問う」ていると考えられるのであるという。氏はさらに、「若紫」巻までさかのぼり、紫の上の最初の手習歌、「かこつべきゆるを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん」もまた、藤壺のゆかりゆえに、二条院に連れてこられたことを知らぬ若紫が、自らの二条院での存在意義を問う歌であると述べられる。源氏との関係の始まりにおいて、紫の上が源氏の側に存在する意義を見いだせなかったという指摘は重要である。紫の上が、自分が源氏にとつて藤壺の形代であったことを、承知していたかというのは、難しい問題であるが、それを承知していようと、なかるうと、紫の上と源氏の関係の始発において自身がなぜ源氏の側に置かれるのか、根源的な理由が見いだせず、不安を覚える結果となることは変わりがないであろう。

針本氏が挙げられた「若菜上」巻と「若紫」巻における紫の上の手習の場面に共通するのは、手習をする紫の上の傍らに源氏がいて、手習の形式をとりながらも、紙の上で贈答がなされることである。

まず、「若紫」巻の手習から見よう。確かにこの和歌は、針本氏のいわれるように、「なぜ、今自分は二条院にいるのか不安でしかたがなく、いったい、どなたの身代わりなのだろうか」の意も持ち得よう。その意味で、この歌は若紫の意図を超えて深くつながりうる紫の上を描きうるのだという(35)。たとえ源氏との将来に不安を覚えようと、紫の上は源氏とのつながりを前提として、自身の将来を模索するより他ない。彼女が主体的に何かをなしたいと思う時に、源氏から逃れるための方便として、出家を願うのは当然の成り行きだろう。

このように、紫の上の手習の場面に源氏が密接に関わっていることは、紫の上の存在価値の模索が源氏の存在を無視して語れないことを証している。彼女はあくまで源氏の妻としての立場から自己の存在意義を問うより他ないのである。若菜巻において、源氏との関係に不安を感じ、出家という主体的な源氏からの離脱も認められない紫の上の存在価値模索が、袋小路に入ったような様相を呈してくるのは必然の帰結であった。それは、源氏の養女として、そしてやがて妻として、源氏との関わりの中に生かされた紫の上独自の矛盾であり葛藤なのである。

紫の上の存在価値模索が困難である理由として、彼女が源氏の側に置かれる根源的な理由を見出せなかったこと、源氏との密接な関わりゆえに存在価値模索すら、源氏抜きにはなされないことを挙げた。紫の上の存在意義模索が、源氏との将来に不安を覚える所から出発している事を考えると、源氏との関係を前提としながら自己の存在価値模索をしなくてはならないというのは、それだけで矛盾である。さらに、一般的に人が自己の存在価値を見出そうとするときには、多くの場合他者の評価による他なく、紫の上の場合も例外ではないということが、彼

女をさらに苦しめることとなる。教養の有無を判定するのが、他者であり世間であることは既に述べたが、紫の上は源氏を含む他者に常に教養高い人として評価されるように努力をしてきた。しかし、世間は教養の高さのみで人を評価するわけではない。女三の宮が朱雀院鍾愛の内親王として世間に重んじられ、明石御方が将来の天皇の血統上の祖母となる中で、紫の上は教養の高さや人柄等、本人の美質のみを武器にして、女三の宮や明石よりも高い評価を世間から得られるであろうか。彼女の自己の存在意義模索は、徹底的に困難なものとして描かれていくのだ。

女三の宮の降嫁は、紫の上に己の美質で源氏をつなぎ止めることとの限界を知らしめ、彼女の自尊心をひどく傷つける結果となった。しかし、紫の上の表向きの尊厳は、辛くも守られたといえよう。「若菜上」巻には、女三の宮と親密に交際する紫の上の態度から、世間の噂も静まったことが書かれる。紫の上が屈辱的な世評にさらされずにすんだのは、本人の努力によるのだが、源氏の配慮も見逃せないのではなからうか。四十の賀主催などの活躍の場が与えられたことで、対外的に紫の上の威勢が衰えないことを示せたことの意味は大きかったのではないかと思う。また、「若菜下」巻の女樂の後、源氏が「君の御身には、かの一ふしの別れより、あなたごなた、もの思ひとて心乱りたまふばかりのことあらじとなん思ふ。」と紫の上に語る

のは、源氏の独りよがりであるようにも思われる。しかし原岡文字氏は、物語第一部において紫の上が「もの思ひ」する用例は明石巻に一例あるのみで、「もの思ひ」の用例からのみ紫の上の苦悩を計るのであれば、源氏のこの言葉も少なくとも第一部においては外面的には正しいという(36)。「若菜」巻以降も紫の上の権勢が衰えないことは、物語が繰り返し語るところであり、それは紫の上本人の努力のみではなく、源氏の配慮が不可欠だっただろう。しかし、紫の上は外面的な体面が守られるだけでは満足できず、あくまで六条院内での存在価値の模索にこだわりの続けた。やがてこの存在価値の模索は、当然の帰結として行き詰まり、紫の上は発病する。紫の上の発病は、彼女を六条院から離脱させることとなり、紫の上の思考にも変化をもたらしたと考えられる。発病から死を迎えるまでの紫の上の最晩年を、次章に詳しく見ていく。

注

- 1 林田孝和氏「紫の上の妻の座」『国学院雑誌』一九八三・五、「源氏物語第二部の主題―紫の上の妻の視角から―」『野州国文学』一九八三・三、宮川葉子氏「紫上試論―紫上の社会的・経済的独立をめぐって―」『中古文学』一九九二・一一、園明美「紫上の位置づけに関する一試論―大臣嫡妻から准後宮へ―」『中古文学』一九九八・五
- 2 宮川氏、注1前掲論文
- 3 「但嬪女御及孫王大臣嫡妻兼置限兵衛門。」『国史大系「延喜式」』雑式
- 4 園氏、注1前掲論文
- 5 林田氏は、注1前掲「源氏物語第二部の主題(副題省略)」において若菜上巻で、女三の宮の乳母である弁が、「方々につけて御陰に隠したまへる人、みなその人ならず立ち下れる際にはものしたまはねど、限りあるただ人どもにて、院の御ありさまに並ぶべきおほえ具したるやはおはすめる。」と、准太上天皇に相応の妻が源氏にいない事を指摘していること、朱雀院に、女三の宮との結婚をほめかされた夕霧が「はかばかしくもはべらぬ身には、よるべきもさぶらひがたくのみなむ」と、正妻兼居雁の存在を無視した発言をしていることを挙げて男の身分が高くなれば、正妻も相応に換える習慣があったとし、正妻であった紫の上が、准太上天皇源氏の妻として相応しい女三の宮に置き換えられたのだと説明される。
- 6 園氏、注1前掲論文
- 7 中野幸一氏「紫の上の妻の座とはいかなるものであったか」『国文学』一九八〇・五、工藤重矩氏「若菜巻以降の紫上の妻としての立場」今井源衛編『源氏物語とその周縁』一九八九、木村佳織氏「紫上の妻としての地位―呼称と寝殿居住の問題をめぐって―」『中古文学』
- 8 工藤氏、注7前掲論文
- 9 木村氏、注7前掲論文
- 10 梅村正子氏「撰関家の正妻『日本古代の政治と文化』一九八七、吉川弘文館
- 11 工藤重矩氏「二夫一妻制としての平安文学―かげろふ日記と源氏物語―」『文学』一九八七・一〇
- 12 園氏、注1前掲論文
- 13 倉田美氏「若菜巻」『養女養育婚姻』譚の生成「父と娘の「甘い蜜の部屋」」『源氏物語の鑑賞と基礎知識』一九九九・四
- 14 高木和子氏「結婚―光源氏と紫上の関係の独自性」増田繁夫ほか編『源氏物語研究集成第十一巻』二〇〇二
- 15 今井久代氏「紫の上と和歌―少女が女になるまで」『源氏物語構造論―作中人物の

動態をめぐって』風間書房 二〇〇一

- 16 高木氏、注14前掲論文
- 17 木村氏、注7前掲論文
- 18 川名淳子氏「物語絵」と「雛」をめぐるまなざし」後藤祥子ほか編『論集平安文学』勉誠出版 二〇〇一
- 19 川名淳子氏「若菜の君―絵と雛遊びに興ずる少女―」『むらさき』一九八八・〇七
- 20 秋山虔氏「紫の上の初期について」『源氏物語の世界』東京大学出版会 一九六四
- 21 中西紀子氏「若菜の遊び空間―子雀の飼育と雛遊びと仲間たち―」『源氏物語の姫君―遊ぶ少女期―』淡水社 二〇〇三
- 22 中西氏、注21前掲論文
- 23 今井久代氏「紫の上物語の主題と構造」『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』風間書房 二〇〇一
- 24 尾崎佐永子氏「源氏の香り」一九八六、求龍堂
- 25 小町谷照彦氏「紫の上の苦悩―紫の上論3」秋山虔ほか編『講座源氏物語の世界 第六集』有精堂 一九八一
- 26 後藤祥子氏「若菜―以後の紫の上―」『源氏物語の史的空間』東京大学出版会 一九八六
- 27 武者小路辰子氏「若菜巻の祝賀」『源氏物語 生と死と』武蔵野書院 一九八八
- 28 川名淳子氏「若菜巻、光源氏四十賀について(一)―紫の上主権の質を中心に―」一九八四、『立教大学日本文学』
- 29 高田祐彦氏「光源氏の賀宴―儀礼と心の関係―」『養書想像する平安文学第二巻』勉誠出版 二〇〇一
- 30 川名氏、注28前掲論文
- 31 中西紀子氏「回歸する遊び空間―四十賀宴と法華經千部供養会の催し―」『源氏物語の姫君―遊ぶ少女期―』淡水社 二〇〇三
- 32 後藤氏、前掲注27論文
- 33 針本正行氏「紫の上の手習歌」『源氏物語の鑑賞と基礎知識』二〇〇〇・二二
- 34 今井氏、前掲注15論文
- 35 篠塚純子氏「紫の上の「独詠歌」一首から」鈴木一雄編『平安時代の和歌と物語』桜楓社 一九八三
- 36 原岡文字氏「紫の上の「祈り」をめぐって」『源氏物語の人物と表現 その両義的展開』翰林書房 二〇〇三